



# カメラ探訪

## 文学のふるさと

その22 人吉城



### 「古城物語」 —南条範夫—

この「古城物語」は日本のいくつかの古城にまつわる物語りを集めたもので、武士社会の悲喜劇をえぐり出している。

「人吉城は北を球磨川、西をその支流胸川によって囲まれ、東と南とは丘陵の断崖に臨んで濠をめぐらせた要害である。

これは「人吉城の巡見使」の一節で、物語りは江戸時代、幕府が派遣していた諸国巡見使の制度とこれにおびえる小藩、これを見越したニセの巡見使一行が人吉藩をかつぐ。

—平山謙二郎著「文学のなかのふるさと」

から—

### わたしの ふるこの 郷土

八代郡東陽村立種山小学校 六年 黒田裕一

私達の郷土東陽村は八代郡の東北部で宮原町から約四キロメートル東へ（山地の方）行った所にあります。四方を山に囲まれ、小川町、泉村、五木村、八代市、宮原町と境を接する山間地と準山間地の村です。

村の中には県道の人吉—宮原線、宮原—甲佐線、小川—八代線がたてよこに走り、特に人吉—宮原線の五木村との境近くにある大通峠からの見晴らしは遠くは熊本、八代郡市から雲仙まで見え、仲々の絶景です。

私達の村は、昭和三十年に種山村と河俣村が合併して生まれました。八代郡の東の方にあり、美しい川や、緑の山々に包まれているので希望をこめて東陽村と名付けられました。

人口約三千五百人、戸数約七百九十戸、（そのうち農家は五百五十戸）、店や工場も少なく静かな村です。悩みの種は、年々人口が少しずつ減り、特に若者が少なく老人が増える現象になっていることです。

村の中には中学校一つ、小学校二つ、分校二つがあり、小学校一つ、分校二つはへき地指定を受けています。私たちの学校は旧種山村の中心部にあり氷川と河俣川にはさまれた美しい環境にあります。

村の八七％は山林で、耕地は三百九十三ヘクタールです。耕地のうち田が五三％、畑二％、果樹園四五％で、果樹園は二十年前の五％と比べると大へんふえています。生産されるものは材木、みかん、生姜、茶、米が主で、最近えのきだけの栽培、線香の原料づくりをしているところもあります。特に生姜は村の特産物として役場や農協でも力を入れ毎年盛んな生姜まつりも開かれ品評会、即売会、演芸会などで振われています。耕地面積一ヘクタール未満の農家が七五％もあり、収入を増やすため兼業や、組合わせた生産をくふうしています。

この村には種山の石工で有名な橋本勘五郎を初めとする石工さんたちの遺したためがね橋が二十幾つあり誇りになっています。私たちも、この豊かと言えなくても、静かな美しい村をもっとよくするため努力していきたいと思っています。